

岩石伝説の身体性に関する一考察

— 『日本伝説大系』と『日本の伝説』を中心に—

宋 丹丹

総合研究大学院大学 文化科学研究科 国際日本研究専攻

要 旨

本稿では全国の各地の伝説を所収した『日本伝説大系』と『日本の伝説』をテキストに、身体に関する岩石伝説に着目し、その特徴と背後にある信仰などについて考察したい。

本稿では特に身体的な特徴の表れる血の出る岩石、声の出る岩石、成長する岩石、米を食べる岩石の伝説を取り上げ、それぞれの岩石の特徴を分析した。まず、血の出る岩石伝説において、岩石の居場所は境であり、割るまたは悟ることによって不思議な色の血が噴き出した。また同時に、割る人は死ぬか発狂するかなどの罰を受けた。血が出ることによって、岩石への畏敬の気持ちを持ち、依り代またはタマが宿る岩石を神聖視したと言える。次に、声の出る岩石伝説は主に泣く岩石伝説と話す岩石伝説に分けられる。人間の言葉、動物の声、鬼の泣き声などの言語で元の場所に帰りたい、異変の予告などを伝えた。米を食べる岩石伝説では岩石が生きもののように食糧を食べる。また、成長する岩石伝説は大きくなる岩石と小石を生む岩石の伝説に分けられ、岩石は成長力と生殖力を持っているとみなされていたこと明らかとなった。

血が出る岩石、声を発する岩石、米を食べる岩石と成長する岩石という4つの身体性には、共通の特徴も見られる。まず、岩石の活動時間が夜であること。そして、岩石の言葉は人間に通じるものだけではなく、動物の鳴き声などの岩石特有の言語も発する。そのほかに、岩石の成長する速さは百年、千年かかる。さらに割られたら死ぬ岩石もある。一つの岩石がすべての身体的特徴を備えているわけではないが、小石を生む岩石があり、成長する岩石があり、さらに死ぬ岩石があり、人間の誕生から死までの身体的特徴を備え各種の岩石伝説がある。

岩石が身体性を持つのは、岩石が神の依り代だけではなく、岩石そのものにもタマがあると考えられてきたからだ。また、アニミズムの考え方によって、石、木などのあらゆる自然物は人間と同じく、靈魂がやどっていると考えられてきた。また、岩石は人間の一生とも緊密に関わり、通過儀礼にも大きな役割を果たしてきた。このような岩石の特徴が、身体性を持った数多くの多様な伝説を生み出してきたと考えられる。

キーワード：岩石伝説、岩石信仰、身体性、アニミズム、通過儀礼

1. 日本の岩石伝説	3.2.1 泣く岩石
2. 身体に関する岩石伝説の概観	3.2.2 話す岩石
2.1 テキストにおける身体に関する岩石伝説	3.3 米を食べる岩石
2.2 現地調査による身体に関する岩石伝説	3.4 成長する岩石
3. 身体に関する岩石伝説の特徴	3.4.1 大きくなる岩石
3.1 血の出る岩石	3.4.2 小石を生む岩石
3.2 声の出る岩石	4. 岩石の身体性と岩石信仰
	5. 結論

1. 日本の岩石伝説

日本の多くの伝説の中に、岩石に関わる次のような伝説がある。

陀賽石 岡山県津山市久米郡倭文村大字油木北

里人小祠を建て神石として祀って居る。周囲八間高さ三間、是れより一丁下の路傍に突き出て居る岩がある。之を石根と云て居る。むかし一人の男が石鑿をあてたら紫の血が迸ったと云うことで、今に穿掘の跡がある。地名もまた陀賽と云う¹⁾。

伝説によると、陀賽石を割ると紫の血が出たという。この他、さまざまな伝説を見ていくと、陀賽石のように、血の出る岩石、夜泣き石、成長する岩石などのような伝説がある。本論文では、岩石が血を流したり、泣いたりするという身体的な特徴が表れることに注目し、『日本伝説大系』²⁾と『日本の伝説』³⁾に掲載された伝説の分析を目的とする。

日本の岩石信仰及び岩石伝説に関する研究は、民俗学をはじめ、宗教学、考古学、歴史学など様々な分野から進められてきた。以下、岩石伝説の研究だけではなく、岩石信仰の研究も含めて概観したい。

出口米吉は『石神問答』に先立つ1908年に「我国に於ける石崇拜の痕跡」において、考古学の

立場から岩石崇拜を分析した⁴⁾。出口は岩石を崇拜するのは岩石そのものを崇拜するのではなく、この岩石に憑依する神霊を崇拜するのでであると主張し、また石神としての岩石の形には、例えば巨大なる岩石、美しい岩石、赤い岩石、紋様ある岩石、鳥獣の形に似た岩石等があると分析した。また、石神に対する所願は数種あるが、雨乞い、子祈り、健康を祈るものが最も多いことも指摘した。

柳田国男は『石神問答』において関東から西日本に広く分布している「シャグジ」という神に着目し、山中笑（共古）、白鳥庫吉、伊藤嘉矩などの研究者との討論の中で、シャグジに石神という字をあてる例や、釈護子・社宮司・遮軍神などの字もあることを指摘する⁵⁾。また神々の名前と地名の中で、サ行とカ行の組み合わせが多いことから、それらの言葉は「塞」「柵」「避」「障」の意味を指し、シャグジは境界を守る神であることを指摘した。そして、岩石はシャグジ信仰の素材として、岩石信仰にも境界神的な役割があると示した。

柳田は「生石傳説」では成長する岩石と小石を生む岩石伝説を取り上げ、「生石」と名付けた⁶⁾。また、生石神は決して近代の創立ではなく、人々の生殖への崇拜感情が窺えると主張した。「夜啼石の話」において夜啼石の伝説に着目しながら、夜泣き松にも触れた。近世の人は特に子供の夜啼きを止めるために、路傍の石や松などに拝ん

だと論じた⁷⁾。また、生石と夜啼き石の由来は岩石の信仰のみならず、子を求める思いや子供の健康などの社会心理でもあると主張した。

また柳田は、「老女化石譚」で虎ヶ石を手がかりとして女性が石と化した伝説を検討した⁸⁾。境界を設けて女人禁制を標榜していた霊峰は数多くあるが、いずれも聖域の禁を犯すことの恐ろしさを伝えているのであり、岩石の境神の役割を強調した。

柳田国男は『石神問答』から岩石に注目し、『日本の伝説』において、風土記、地方誌などの史料から日本全国の袂石を収集した⁹⁾。袂石とは歴史上の人物の袂から落ち、成長して大きくなった石のことである。そして、たもと石の成長について、元々岩石は尊ぶものとして信仰されること、わざわざ遠いところから運んでくるほどの小石ならば、何か因縁があり、また不思議な力があること、伊勢石、熊野石などが伊勢の神、熊野権現などの神の力で成長したことといった要因を挙げた。

柳田国男の『石神問答』の刊行を記念し、『郷土』の「石」の特輯号では実地調査による岩石に関する報告が78本所収された¹⁰⁾。その中で、折口信夫は「石に出で入るもの」において、岩石信仰の発生原因を検討し、巫祝を司る人々は岩石の中に「タマ」があると信じたこと、卵や瓢箪の中に生命が生まれるという現象から石も成長し、小石を生むと信じられたことの二つの要因を挙げた¹¹⁾。伊波普猷は「成長する石」において、南島における成長する石を集め、石に靈魂が出入することを成長する要因と捉えた¹²⁾。この二本の論文とも、岩石に「タマ」があることを指摘した。

大場磐雄は1930年代から巨石崇拜や配石遺構などの岩石信仰を研究したが、特に「日本に於ける石信仰の考古学的考察」では、『古事記』、『日本書紀』、『風土記』などをもとにして、少なくとも奈良時代における神道祭祀においては石神・磐座・磐境の岩石の使い方があったことを

明らかにした¹³⁾。そして、特徴的な外見、堅固、不変などの性質などから、岩石信仰が始まったとも指摘した。

野本寛一は『石の民俗』において、静岡県の岩石を「信仰と石」「海と石」「道と石」「暮らしの中の石」に分け、民俗学や文化史的視点から古典や民俗誌などの文献を引用し、また文化史的な視点と結んで岩石の民俗を検討した¹⁴⁾。また、巨石のみならず、小石、玉、砂の民俗も取り上げた。

野本は『石と日本人』にて日本全国の岩石を考察したで、岩石信仰のほかに、祭りや行事などにおける岩石、古典文学における岩石など、幅広く岩石に関わる事象を拾い上げた¹⁵⁾。そして『石の民俗』を踏まえ、石と日本人の関わりを、より広い範囲でより具体的に論じ、さらに石以外の民俗事象とのかかわりを分析した。

大護八郎は『石神信仰』で「総説篇」と「各説篇」に分けて、岩石信仰の体系とその役割、および民間信仰における石神を分析し、特に石仏信仰の根底は石神信仰であると論じた。また、多くの石神信仰の中で産石・成長する石に触れ、石自身が成長し、あるいは子供を産むのは石が靈力あり生命あるものからであると論じた¹⁶⁾。そして、生成の靈力のある石に祈願することによって、人間自身安らかに子を産むことができるという、信仰が芽生えたことを主張した。

五来重は『石の宗教』において宗教民俗立場から、「自然の石」「配列された石」「加工された石」「石面に文字や絵を彫られる石」に分けて岩石信仰を分析し、日本古代の岩石信仰を根底に仏教・道教石造物が形成されていると論じた¹⁷⁾。五来は「これは自然界の謎を石が背負っているように、人間の心の謎を石が背負っているからだろうとおもう。そして人間の心の謎は宗教の謎である。したがって宗教の謎が解ければ、石の謎も解けるにちがいない」¹⁸⁾と論述し、岩石にまつわる文化や信仰を宗教として扱った。

中沢厚は『石にやどるもの—甲斐の石神と石

仏』において、山梨県の丸石神の約700カ所の事例を調べ上げ、丸石信仰を検討した¹⁹⁾。しかし、丸石の神は魂の入れ物なのか、すべての丸石は神として祀られるのかなど問題はまだ解明されていない。

石上堅は『新・石の伝説』において日本全国に残る岩石の伝説を収集した。岩石に特化した初めての民俗事例集であるとされている²⁰⁾。本書には「子を産む石」、「泣き出す石」、「生まれ変わる石」、「物をいう石」という四章がある。「子を産む石」という章では、境の石に霊力が宿ると信じられ、人々は身ごもり・出産の祈願を、石に向かって繰り返していると論述した。「泣き出す石」では、岩石の境神の役割を強調し、元の場所を離れることによって岩石が泣き出すとした。「生まれ変わる石」では、折口信夫の「石に出で入るもの」の論点と同じく、石が成長するのは、石の中にタマが入り込めると信じたからであると指摘した。「物をいう石」において、各地の物いい石・叫ぶ石なども人間の運命を左右することができ、神座である岩石の力を強調した。石上氏は成長する岩石、泣く岩石、話す岩石に注目し、岩石の境神の職能を強調し、岩石信仰の多様性が論述されたことが分かる。

長山幹丸は『石一伝説と信仰』において「歴史の石」、「伝説の石」、「信仰の石」及び「生活の石」という四つの方面から秋田県の民俗資料を収集し、岩石伝説を分析した²¹⁾。そのうち「信仰の石」を中心に、岩石伝説における庚申信仰、如来菩薩信仰等、そして出羽三山信仰等の山岳信仰及び蚕神信仰等の民間信仰を研究した。

吉川宗明は『岩石を信仰していた日本人』にて、様々な岩石信仰の場を取り上げて文献史学・考古学・民俗学という視点から岩石信仰を分析した。吉川氏は岩石信仰の研究史、信仰の種類、信仰の現場、信仰の周辺など多方面から日本の岩石信仰を検討した²²⁾。特に岩石信仰を、信仰対象としての岩石、媒体としての岩石、聖跡としての岩石、痕跡としての岩石、祭祀に至らな

かったものとしての岩石という五種類に分け、有効な岩石祭祀の機能の分類方法を挙げた。

上述のように、日本の岩石信仰と岩石伝説の中には、泣く岩石、成長する岩石などの身体特徴を持つ岩石伝説を考察する研究がある。特に柳田国男は『石神問答』から岩石信仰と岩石伝説に注目し、『日本の伝説名彙』の第2部「石・磐」の伝説にて子持ち石、夜泣き石などの岩石伝説を取り上げた²³⁾。また『日本の伝説』の「袂石」という一節では、広島、長野、高知、熊本などの地域における成長する岩石伝説を集めた²⁴⁾。ほかに、生石、夜泣き石伝説にも注目した。

折口信夫も「石に出で入るもの」において成長する岩石を分析した²⁵⁾。そして、「霊魂の話」²⁶⁾「石の信仰とさえの神と」²⁷⁾にも成長する岩石に注目し、岩石にタマが入っていると論述した。

石上堅は『新・石の伝説』では子を産む石、泣き出す石、生まれ変わる石、物をいう石などの岩石伝説を収集した²⁸⁾。

こうした先行研究を踏まえて、筆者が注目したいのは次の3点である。第一は柳田国男をはじめ、折口信夫、石上堅などの研究者が子持ち石、夜泣き石、生石などの岩石に注目し、伝説を収集したが、岩石がどのような身体的特徴をもつのかは明らかではないということである。第二はこれらの岩石の身体的特徴によって、何が表現されてきたのかはまだ分からない点である。そして第三は、岩石は人間の生活の中で古くから身近にあり、信仰の対象となりながら、さまざまな伝承も生み出されてきた。身体に関する岩石伝説はどのような信仰と結びついているのかを考察する必要があるだろう。したがって、本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、『日本伝説大系』、『日本の伝説』をテキストに、身体に関する岩石伝説を分析することによって、その特徴と背後にある信仰などの全体像を考察する。

2. 身体に関する岩石伝説の概観

岩石伝説は全国各地に点在しているが、本章

では、身体的特徴を有する岩石伝説を概観していく。

2.1 テキストにおける身体に関する岩石伝説

1982年から1990年にかけて荒木博之、野村純一、福田晃、宮田登、渡邊昭五らが北海道・北奥羽（北海道・青森）から南島（奄美・沖縄）まで、地域に分けて伝説を集め、『日本伝説大系』全15巻と別巻2冊の合計17巻を編集した。この中で伝説は「文化叙事伝説」と「自然説明伝説」に大別され、岩石伝説は「自然説明伝説」に分類されている。各地域の岩石に関わる伝説は次に示すように106項目ある。雨石・坪の碑・茂草の石神様（北海道・北奥羽）、磐神岩（中奥羽）、磐司祠・磐司巖・対面石・信夫文知摺石・百合若大臣の墓・弁慶石・腰掛石（南奥羽・越後）、長者岩・殺生石・子守石・しゃべり石・鹿島社の要石（北関東）、弘法大師と芋・千葉石・法論石・虎御石・ばんばあ石・成長する石・石の枕（南関東）、親鸞の腰掛石（北陸）、盗人岩・縁切り岩・鳴石・いぼ岩・亀石・夜泣石（中部）、弁川の石・力石・背競石・戻石・老ケ石、船石・手跡岩・烏帽子岩（北近畿）、聖徳と七不思議・ほうろく岩・夜泣き石・弘法の押上石（南近畿）、あまんじゃくの重ね石・聖石、殺生石・中野の出雲石・夜泣き石・たもと石・腰掛岩・姫岩・牛の足跡・米かみ岩・赤子岩・婆の岩（山陽）、石体天神・星高山・神功皇后・足跡様・傾城岩・高田（山陰）、境石・たもと石・呼び石・夜泣石・馬蹄石・動石・雨乞石・椀貸岩・盲人岩・瞽女岩・鷹の巣岩（四国）、馬蹄石・竈門山由来・琵琶石・児誕生石・礫石・腰掛石・船繋ぎ石・夫婦石・稲妻大蔵とゴットン石・血染めの岩・鯖腐れ石（北九州）、俊寛・景行天皇の腰掛石・女石・西行戻り石（南九州）、力石・志戸桶のビンドウ様・ビジュルの話・宮島御嶽のビッチュル石・ビッチュウル御嶽の石・キョラ石・蹄跡石・足跡石・腰掛石・舟ン帆岩・穴石・布織岩・夫振岩・イブガナシ・ものいう岩・夜泣き石・石になった男・

ハッカネのチブル石・アーバー石・石になった花嫁（南島）で、これらの項目の伝説を合わせると、合計885話になる。その中に「しゃべり石」のような話す岩石、「夜泣き石」などの泣く岩石、「成長する岩石」のような大きくなる岩石など、身体に関する岩石伝説が15項目あり、67話収録されている。

また、1976年から1980年にかけて池田弥三郎、和歌森太郎、坪田譲治らが都道府県47巻に佐渡・奄美・離島の3冊を加えた内容の『日本の伝説』シリーズを刊行した。その各巻とも前半の部分には該当の地域を分けて伝説や伝承地を紹介し、後半の部分には、特に有名な伝承を小説仕立てて書き下している。多様な伝説の中で岩石に関する伝説は最も多くあり、950話を数える。そして、「子宝石」のような小石を生む岩石、「坊主岩」のような血の出る岩石などの身体に関する岩石伝説が73話ある。『日本伝説大系』全17巻と『日本の伝説』全50巻の二つのシリーズにおける身体に関する岩石伝説の重複する部分を除くと全部で110話ある。

これらの110話の岩石伝説は全国各地に点在しているため、表1のように整理してみた。

表1からその分布に一定の傾向がみられる。北海道地方では身体に関する岩石が見出せないのに対し、中国地方と中部地方には濃密に分布し、それぞれ31話、26話がある。四国地方は16話、近畿地方は13話、関東地方は12話があり、いずれも10話以上であるが、東北地方と九州地方は同じく6話しかない。つまり、『日本伝説大系』と『日本の伝説』の二種類のテキストにおける身体に関する岩石伝説の集中する範囲は中部地方と中国地方と言える。その中でも、特に中国地方の岡山県と広島県は岩石伝説が最も多くあり、それぞれ11話がある。岡山県の場合は成長する岩石伝説1話、声の出る岩石伝説5話、血の出る岩石2話と米を食べる岩石3話からなっている一方で、広島県は成長する岩石伝説6話、話す岩石伝説1話と米を食べる岩石伝説の4話がある。

表1 『日本伝説大系』と『日本の伝説』における身体に関する岩石伝説の分布状況

地域名	県名	伝説数(話)	合計(話)
東北地方	青森県	5	6
	秋田県	1	
関東地方	東京都	1	12
	埼玉県	3	
	神奈川県	2	
	群馬県	6	
中部地方	富山県	2	26
	石川県	2	
	山梨県	3	
	長野県	10	
	岐阜県	1	
	静岡県	6	
	愛知県	2	
近畿地方	滋賀県	1	13
	京都府	2	
	兵庫県	1	
	奈良県	3	
	大阪府	6	
中国地方	鳥取県	8	31
	岡山県	11	
	広島県	11	
	山口県	1	
四国地方	徳島県	3	16
	香川県	4	
	愛媛県	5	
	高知県	4	
九州地方	福岡県	1	6
	沖縄	5	
		合計(話)	110

岡山県も同じく11話あるが、身体に関する特徴の記述が多様である。

2.2 現地調査による身体に関する岩石伝説

岡山県は、表1で示したとおり、全国的にも身体に関する岩石の伝説が多い地域である。そこ

で筆者は、実際に岩石伝説のある場所を訪ねて、岡山県で現地調査をした。岡山県の身体に関する上記11話の岩石伝説のうち「坊主岩」、「生石皇様」、「石神」の3か所とそれ以外の他の2か所、泣き石と亀甲岩について現地を訪れた。

坊主岩は浅口市金光町占見にあり、JR金光駅から北へ1.5kmほど行った大宮神社の裏手にある平安中期の陰陽師・蘆屋道満ゆかりの池の北側の水際にある。坊主岩は、坊主頭のような形をし、高さ7m・直径6mの大岩である。岩を取り除こうとしたところ、岩は二つに割れて、真っ黒な血が流れ出したという。現在は蘆屋道道満の墓と同じく観光スポットになっている。同じ浅口市にある「生石皇様」はJR金光駅の隣の駅鴨方駅から西南に約1km行った六条院中生石の道辺にあり、檜の木の囲いの中に祀られている。石の上には穴が空き、それほど大きくない石である。元の場所から岡山城下に持ち運ばれ、夜になると「生石にいのう、生石にいのう」と泣き出した。これに怒った藩主が手討ちにすると、血が噴き出てきた。この奇怪な出来事のために「生きている石」とみなされ、急ぎ元の場所に戻され、村人によって大切に扱われるようになったという。現在でも氏神祭礼の当日に祭りを行っている。特に、他郷にいる人が「帰りたい」と願をかけるとよいと言われている。

「石神」または「米食石」は二上山麓から北へ約3kmの油木上大原の七森神社に高さ一丈五尺(約5m)、周囲二丈(約6.6m)の大岩があり、頂上に穴があって北に向けて口をあいたようになっている巨岩である。米を食べたため、石を割ろうとしたが、ノミをいれた最初の男が倒れて死に、石から紫の血が噴き出し、雷雨が突然に起こり、闇夜のようになった。人々は恐れて逃げ去ったという。

また、二つのテキストに掲載されていた以外の伝説の場所でも現地調査を行った。泣き出す石または鳴岩は岡山市大窪荒田の中にある長さ約20m、幅約10m、高さ約9mの大岩である。こ

の岩の一部に鉢巻形にノミの跡があるのが目を引くが、これは石工がその岩を割にかかって矢穴を穿ちかけたところ、岩が鳴り（泣き）出して気味悪く中止したという。またもう一つの「信憑性が高い説」として、矢穴を開けることで、夏の暑い盛りに滲み出てくる水銀を採取していたが、それが採れなくなったので“亡きがら岩”と呼んでいたのが転訛して“鳴岩”となったという。

亀甲岩は津山市久米町中央町原田にある亀の甲の形をした巨石である。この岩の名に因んでこれが地名となり、駅名となった。岩の周囲には民家や公共の建物が建ち並び、神聖な感じはなくなっているが、弘法大師の像を乗せてせり上がり、亀甲岩となったと伝えられている。そして、岩は大きくなると伝えられたが、ある時この岩を砕こうとした男は、発狂して死んだともいう。具体的な考察は次章に譲るが、岡山県における身体に関する岩石伝説の身体的特徴は、血が出る、声を出す、米を喰らう、そして成長するということがまず分かった。

また、身体に関する岩石伝説について、柳田国男は「生石伝説」では大きくなる石と小石を生む石を「生石」と呼び、『日本伝説名彙』においては声を出す岩石の「声石」や小石を生む岩石の「子持ち石」などと呼んだ。石上堅は『新・石の伝説』では小石を生む石を「子を産む石」、泣く石を「泣き出す石」、成長する石を「生まれ変わる石」、話す岩石を「物をいう石」と名付けた。

本論文では先行研究に基づき、岡山県での現地調査の成果と合わせ、身体に関する岩石のそれぞれの特徴を明確にするため、身体的な特徴の表れる伝説のうち、血の出る岩石、声の出る岩石、米を食べる岩石、成長する岩石を取り上げて分析していく。泣く岩石と話す岩石は、声の出る岩石に含め、また大きくなる岩石と小石を生む岩石を「成長する岩石」とした。以下、順を追って伝説を見ていきたい。

3. 身体に関する岩石伝説の特徴

本章では身体に関する岩石伝説を、血の出る岩石、声の出る岩石、米を喰らう岩石、成長する岩石という身体的特徴をもつ伝説について、それぞれの特徴を考察していく。

3.1 血の出る岩石

群馬県前橋市には岩神町という町があり、町名は血の出る岩石に由来する。大きな岩が岩神町までに飛んできて、割ったら岩から血が出たという。そのため人々はこの岩石を岩神稲荷として祀った。現在この岩は天然記念物として保存されている。

岩神 群馬県前橋市岩神町

比利根水傍に在り。四つの塊石累積し、高さ三丈余、広さ三四十歩。石は紫赤色を帯ぶ。若し其の下に到るときは則ち危飾道（い）うべからず。肌は汗かき四肢収らず。墨石の間に諸木及び藤蘿を生ず。相伝う。古え洪水天に漫（みなぎ）り、片石山の北傍解けて流れて此の地に止まる。石工之を擢て造屋の用に充てんと欲す。石中声有り、人の号ぶが如し。濃血流れ走る。石工四肢麻痺し、両目眩暗して倒れ死す。故に土人相尊んで神と称す²⁹⁾。

この伝説によると、岩神は山の一部であり、片石山の北部が崩れて洪水で流されてきた。また、その点では、洪水伝説とも言える。石工が造屋のため岩石を割ろうとすると、岩石が泣きながら血を出した。このような怪異が起こった後、石工も倒れて死んだ。それ以後、当地の人々はこの岩石を神として尊んできた。

「岩神」伝説によると岩から血が出るのは、石工が岩を割ろうとしたからであった。割るといふ動作が血の出た要因であると言える。同じような伝説はほかにもある。現地調査した岡山県浅口郡金光町占見にある「坊主岩」も、割られ

て血が出たという。『日本伝説大系』の記述から紹介する。

坊主岩 岡山県浅口郡金光町占見
国鉄金光駅から北へ一・五キロほど行った大宮神社の裏手の道満池に、坊主岩という人の頭にも似た岩がある。昔、猟師がその岩に金光の山鳥が止まっているのを見つけ、矢をつがえたが身動きもしないので気味が悪くなり、そのまま帰った。翌日、また猟師がそこへ行くと、金の山鳥は同じように岩に止まっている。そのことはたちまち村の評判になり、国司の耳にも入って、陰陽師の蘆屋道満に占ってもらおうと「村に凶事の起こる兆しだ」と告げた。村人たちは驚き、相談した結果、岩を割ってしまおうということになり、火薬を用意し、藁を積んで火をつけたところ、大音響とともに粉微塵になったと思ったら、岩は二つに割れたのみで、割れ目から黒々とした血が流れだした。しかし、その岩が血を流れだしたせいか、心配された村の凶事は起こらなかったという³⁰⁾。

坊主岩は池の端にあり、凶事の兆しとして割られて黒い血が流れ出した。前述した岩神町の岩石は、割ろうとした時、血が出たのに対し、坊主岩は割ってから血が出た。割る前または割った後であれ、割るという岩石を壊す動作で血が出る。そのほかに、岩石は「悟る」ことでも血が出た。

夜泣き石 長野県更級郡
漆腹と腹の前の境に夜泣き石がある。二つに割れた石で、上に南無阿弥陀仏と刻んだ石碑が立っている。むかし、姨捨山に捨てられた老婆が石になって、たびたび夜泣きして鳴動したので、西行法師に頼んでお経をあげてもらったところ、悟って二つに割れて血をふいたという³¹⁾。

「夜泣き石」の伝説における捨てられた老婆は石になってたびたび夜泣きしていたが、西行法師の読経により、悟って二つに割れて血を吹き出した。夜泣き石の血が出たのは石になった老婆が悟ったからである。

伝説ではまた、岩上町の岩神から濃血が流れだし、夜泣き石から血を吹きだし、坊主岩から黒い血が出た。岩神と夜泣き石から出た血は普通の血であるが、坊主岩から出た血の色は黒である。坊主岩のほかに「2.2.2 話す岩石」で分析する「生石皇様」³²⁾から出た血の色も黒である。さらに、紫の血が出た岩石伝説もあり、以下のように収録されている。

石神 岡山県久米郡久米町油木上
七森神社に高さ一丈五尺、周囲二丈の大岩があり、頂上に穴があって北に向けて口を開けたようになっている。昔、出雲のある村で、稲が実らないので、村人は困っていた。一人の僧がやってきて、「美作国の倭文庄の石神がここにやってきて穀物を食っている。その石の精を取り除かなければ害はなくなる」という。村人が七森神社にきて石をたたくと、たちまち倒れて死んだ。石の根から紫色の血が湧き出て天気も急変した。出雲の人は恐れて逃げて帰ったという³³⁾。

僧が村の不作の原因は、石神が穀物を食べてしまうからであると告げる。村人が石神を割ろうとした時、村人は倒れて死んでしまい、岩石の根から紫色の血が出るとともに、天気も異変した。紫の血が出た石神は黒い血が出た坊主岩、後述するように生石皇様の伝説と同じく、不思議な色の血が出た。

テキストの『日本伝説大系』と『日本伝説』には血の出る岩石伝説が8話あり、多いとは言えないが、血の出る岩石の特徴がよく表れている。まず、すべての岩石から血が出るわけではない。「岩神」、「坊主岩」と「夜泣き石」伝説から血の

出る要因をみると、一つは石工が岩石を割ろうとした時または割った時という外因、もう一つは石が悟るという内因である。テキストにある8話の伝説には、悟ることで血が出た岩石伝説は1話しかなく、残りは割ろうとした時または割った時に血が出る伝説である。従って、血が出る主要な要因は外因によるものだと言える。血の出る岩石は主に水辺、山、村境、塔の下、道辺に存在し、いわゆる境と言える。境という場所は慣れ親しんでいる既知の領域とそうではない領域の区切りの場所である。このような境という場所は、超自然的な現象が起きる要因の一つだと推測できる。さらに、前述した岩神と坊主岩は水辺にあり、夜泣き石は境にあり、石神は山にある。「血の出る礎石」³⁴⁾の伝説では、塔の礎石は塔の土台であり、直接地面に接することを避ける地面と塔の境だと言える。「生石皇様」³⁵⁾の伝説では、生石皇様の場所は道辺であり、境ではないが、生石皇様はもともと辻や坂などのような場所にあったと推測できる。このように伝説における岩石は、水辺や山、村境、塔の土台にあり、これらは空間の境界に位置するという共通性がある。小松和彦は境が日常生活を送っている慣れ親しんだ空間と未知の世界、危険が満ちた世界との出入り口であり、境界が「人間界」でもあり「異界」でもあるという両義性を帯びた領域であると指摘し、また、境界に住む者は、人間界と異界の両方の性格を帯びた者としてイメージされることになることと主張した³⁶⁾。血の出る岩石も境にあり、「人間界」と「異界」両方の性格を帯びているので、岩石から血が出るのは不思議ではない、と人々想像し、噴き出した血には紫の血と黒い血も岩石なりの血だと考えたのだろう。

また、先述した岡山県久米町の石神伝説では村人が石の精を取り除こうとした時、紫の血が出ながら、天気が急変したのは石神を取り除くことを阻止したからと推測できる。同じく岩神町の岩神を割ろうとした時、岩神から声があがり、

石工も四肢麻痺し、倒れて死んだ。「老ケ石」³⁷⁾という伝説においては老ケ石を割った石工も精神に異常を来し、狂死した。「血の出る礎石」³⁸⁾では塔の礎石を割った石工も逃げ帰り、病みついて死んだ。このように岩石を割った石工のほとんどが死んだと伝承されていることが分かる。そして、ここまで紹介した血の岩石伝説は、上記の岩神をはじめ、石神や生石皇様などは、神として祀られたり、特別視されたりしたことがわかる。

3.2 声の出る岩石

『日本伝説大系』と『日本の伝説』における声の出る岩石伝説は、身体性に関する岩石伝説の中で最も多くある伝説である。声の出る岩石とは泣く岩石と話す岩石を指すが、2種類の伝説は重なる部分もある。本節では泣く岩石と話す岩石についてそれぞれ考察する。

3.2.1 泣く岩石

泣く岩石伝説とはその名の通り、人のように泣く岩石の伝説を指す。例えば、日本全国に伝えられている夜泣き石は、以下のように記されている。

夜泣き石 東海道日坂村小夜の中山

その昔、小夜の中山は街道唯一の難所であるとともに淋しい危険な場所であった。ある夜の事、妊婦がこの中山を通り、余りの疲れにそばの石に腰かけていると賊が表れてその妊婦人をころしてしまった。その時、はからずも妊婦は子供を産んだ。婦人の腰かけていた石が斬られたので子供は石の下に無事に助かって悲しい泣き声をあげていた。この時からこの石は夜毎に赤坊の泣き声を発したが、弘法大師がここを来遊の際、供養を営み、この石に南無阿弥陀仏の六字の妙法を刻んで弔ったので泣き声がやんだと伝えられている。その後赤ん坊は弘法大

師の手によって餵で育てられたといわれ、今ではその夜泣き石は草木に囲まれて、安置されている。その後子育てに使った餵はこの中山の名物となって今でもここで売られています³⁹⁾。

この伝説からわかるように、妊婦はこの岩石のそばで殺されたが子供を産んだ。そして夜になると岩石は子供の泣き声を発した。弘法大師がここにきて岩石を供養し、子供を餵で育てた。伝説には泣くことをはじめ、仏教的な色彩、餵で子育てをする子育て幽霊の伝説など各種の要素が含まれているが、ここでは夜泣き石の泣くことと夜という二つの要素に注目する。「夜泣き石」の「夜」という時間はすでに考察した血の出る岩石と同じく、岩石の身体的特徴が表出される時間である。

夜泣き石伝説に夜という要素は重要であるが、泣く岩石伝説の場合、夜という時間だけではなく、昼夜に泣く岩石もある。静岡県掛川市日坂の泣き石は、昼となく夜となく赤子の泣き声を発していたと伝えられている。

泣き石 静岡県掛川市日坂

秋の夕暮れに一人の妊婦が日坂の方から中山へ上がってきた。頂上を越して一丁程東へ下がった橋の右側の森の中から一人の男が出てきて、夕方だから泊まっていけとすすめた。女は男の家に行く。男が薪を取りに出た後、女は家の中を見る。男がみるなととめた部屋の中には人骨が散っていた。女は驚いて家を逃げ出る。男は薪を捨てて追ってきて女は捕らえる。女は再び逃走を企てるが失敗し、男は怒りのあまり女を殺して腹中の子を滝の中に投げ込んだ。それから後その滝の中から昼となく夜となく赤子の泣き声が聞こえてくる。数か月後ここを旅僧が通りかかった。この声を聞きつけ滝の中から大きな石を取り出した。そして

何かをいってここを去った。あとで弘法大師が来て其の石へ字を彫ったという⁴⁰⁾。

殺された子供を滝の中に投げ込んだが、大きな石が赤子の泣き声を昼となく夜となく発していた。この伝説は先述した中山の夜泣き石と共通点がある。それは、赤子が泣いたわけではなく、石が赤子の泣き声を発したという点である。夜泣き石の泣く時間は夜であるが、この石は昼夜かかわらず泣き声を発した。この「泣き石」のように、昼に泣く岩石伝説もあるがわずかであり、多くの泣く岩石は夜という人間の活動時間ではない時間に泣き出す。その点について、谷川健一は「夜」は天照大神が天の石屋戸にこもった時、生き物の世界を不安に陥れるものであったとし、夜は神々の支配する世界であり、人の世界ではなかったと主張した⁴¹⁾。つまり、夜は人の活動時間ではなく、ものや神や霊などの活動時間である。したがって、夜に泣きだすのはものや神霊などであると推測できる。岩石伝説には石神として祀られる岩石があるが、先述したように上人や大師などが霊物として封じられた岩石もある。伝説における岩石は神や霊として扱われることもあり、それゆえ神や霊としての岩石は夜に活動していたと伝承されることが多かったと考えられる。

岩石の泣く原因はさまざまであるが、泣き声もさまざまであり、人の泣き声特に子供の泣き声のほか、女性の泣き声、また動物の鳴き声もある。さらに奇妙な叫びや鬼の泣き声がある。泣く原因は人が石の下敷になって死んだため夜になると人の泣き声を発することになったなどがある。例えば、長野県の「夜泣き石」は次のように伝わっている。

夜泣き石 長野県下伊那郡

旧上郷村字別府の金沢橋のたもとの田の中に夜泣石（一名子泣石）というのがある。承徳五年未満水の時、野底川が氾濫して流れて

きた一つの大石で赤子が下敷きになって死んだ。それからのち、夜な夜なその石の下で小児の泣き声をする。里人はそれを憐み、供養のため観世音を建立したという。今でも、この観音に祈ると子供の夜泣きが止むという。里人は大石の地蔵と呼んでいる⁴²⁾。

伝説によると、夜泣き石が泣くのは赤子が下敷になって死んだからである。そして、石の泣き声も小児の泣き声である。『上州の伝説』の産石の伝説では、授乳している母子が石の下敷きになって死んだ。その後、この石から赤子の泣き声が聞こえる。石碑を立て、冥福を祈ると泣き声がしなくなったという⁴³⁾。産石は夜泣き石と同じように、石から赤子の泣き声を発した。そして岩石を供養すると泣き声がなくなった。それは供養すれば、成仏でき、夜泣きは止むのではないかと考えられていたのだろう。夜泣き石という伝説では捨てられた老婆は石に化けて夜になると泣きだしたが、西行上人が供養したところ悟って二つに割れ、泣かなくなった⁴⁴⁾。人の泣き声を発した岩石は供養すると泣かなくなるという共通性がある。

また、岩石が泣かなくなる方法には、供養のほかに元の場所に返すことが挙げられる。例えば、高山城の二代目城主のお墓の石碑であったが、新しい石碑に建て換えてから毎晩白狼の泣き声がした。しかし、元の場所に戻したら白狼の泣き声はなくなった⁴⁵⁾。同じように、黒い血の出る生石皇様も、元の場所に返させたら夜泣きをやめた⁴⁶⁾。つまり、岩石は供養するまたは元の場所に戻せば、泣くのをやめるということになる。

泣く岩石伝説における泣く要因は多くあるが、岩石自体が奇妙な音を発する場合もある。『日本伝説大系』第7巻「自然説明伝説」の70番目「夜泣き石」には奇妙な音を発した岩石があり、夜に音を発したため、夜泣き石とも言われていた。この夜泣き石は菅引沖鳴沢の手前にある七尋も

ある大石であり、その昔丑満刻ともなれば奇妙な音を発するという⁴⁷⁾。子供の夜泣きに効果があるとも伝えられ、子供が夜泣きをしたら、この夜泣き石を拝み、霊験があったとされる。

3.2.2 話す岩石

声を出す岩石伝説の中には、泣く岩石伝説のほかに話す岩石伝説もある。中には泣きながら話す岩石も含まれるので、泣く岩石と重なる部分がある。本節は主に言葉を出す岩石伝説を紹介する。

話すという行為は様々な役割を果たしているが、岩石が話すのも例外ではなく、何らかの情報を伝えるためである。例えば、元の場所に帰りた、異変の予告、人への威嚇などである。『日本伝説大系』と『日本の伝説』のテキストには話す岩石伝説が30話あり、その中に、岩石が元の場所に帰りたいと訴えるものが11話ある。話す岩石伝説の三分の一を占め、最も多くある。岡山県における生石皇様はこのような岩石であり、夜になると泣きながら元の場所に帰りたと言ったという。

生石皇様 岡山県六条院中生石

岡山の後楽園は岡山藩主池田綱政が津田永忠爾命じて造らせたもので元禄十三年に完成した。その完成前、一つのつくばい（自然石の手水鉢）があったらそれで後楽園が完成するという段になり、殿様は家来の者に銘じて領内に適当な石はないかと探させた。家来の人たちが六条院中村の名主平井氏の所に来ると、ちょうど平井氏の土地にいい石を見つけ、名主も「喜んでお殿様に差し上げます」ということになり、岡山城に持ち帰りお殿様に御覧に入れると「これは見事な石だ。早速つくばいにたててみよ」と仰せがあったので、石のいただきに水を入れる穴を掘らせた。するとそこから真っ赤な血汐がふきでたので石屋はびっくり仰

天した。その日も暮れて夜になると石屋は仕事場から「生石へいのう、生石へいのう」というかなしげな声を聞いた。行ってみると石が泣いているのであった。そこで石屋が重臣津田永忠にその由を申し上げたので永忠から殿様に、この血染の夜泣き石のことが報告された。お殿様のお気に召していらしたのだが、「石でも古里は恋しいものか、生石の切ない心にまかせひまをとらせよ」との仰せでおさげになり、再び十里の道を「よいさ、よいさ」とかつがれてもとの生石へ帰ってきた。里人は「石でも魂のある上は神様だ。いつまでも生石の里の守り神になってもらおう」と名主に言うと、名主も「よいおもいつきだ」と自分の畑の道に接したところにまつり野良の仕事に出る途中でも拝めるようにした。

これが今に生石皇様としてまつられている伝説の神の由来である⁴⁸⁾。

生石皇様伝説では生石皇様は夜になると泣くだけではなく、「生石へいのう」という言葉までも発する。言葉を語るのは人間に特有の行為であるが、伝説では岩石も話すことができる。話す岩石の伝説は、ほかにもある。岡山県にはコソコソ岩もある。幅5尺(約1.67m)ほどのコソコソイワと呼ばれる岩があり、夜にそばを通ると、話す声がする⁴⁹⁾。また、岩石の話す内容については、生石皇様をはじめ、夜泣き石などの「帰りたい」という言葉、コソコソ岩のコソコソ話す、そのほかに「囓んでやろう」、「飲んでやろぞ」という威嚇の言葉で人が近寄ることをやめさせる話もある。また、異変の前夜、蛙の鳴き声、鶏の鳴き声、牛の鳴き声などの動物の声を異変の予告として発する場合もある。このように岩石の言葉は人の言語だけではなく、動物の鳴き声や機織りの音と異声もある。

3.3 米を食べる岩石

岩石伝説では岩石から血が出たり、声を発したりするばかりではなく、米を食べるものもある。「血の出る岩石」で紹介した七森神社の石神は、米を食べるため村人を叩こうとしたころ、石の根から紫の血が湧き出た。また、岡山県真庭郡落合町にある米かみ岩も稲を食べたので村は疲弊してしまった。米かみ岩は以下のように記述されている。

米かみ岩 岡山県真庭郡落合町西河内
米かみ岩という高さ三尺、長さ一間ぐらいの岩がある。むかし、この岩が夜出て日名村の稲を食い荒したという。それで日名村は疲弊し、西河内村は栄えたという⁵⁰⁾。

この伝説から米かみ岩の特徴は三つあることがわかる。一つは米かみ岩が巨石であること、米かみ岩が夜という時間に行動すること、米かみ岩が稲を食べたため村人は疲弊してしまうことである。伝説の情報からだけでは米かみ岩の位置は境にあるかどうか分からないが、活動時間は昼ではなく、夜である。岩石は夜に出て稲を食べるため、日名村は不作になって疲弊してしまった。米かみ岩は、村人にとって大切な生活必需品であるとともに収入源でもある貴重な稲を食べてしまったのである。

米かみの岩石伝説には確かに米を食べる岩石があるが、貧乏な農民を庇うため岩石に転嫁する伝説もある。例えば広島県三次市には、米かみ岩という岩石がある。

米かみ岩 広島県三次市重宗山
三次市の重宗山に、口を開けて何か食べているような、米かみ岩がある。
昔、年貢米四俵が一夜のうちになくなっていった。その疑いが貧乏な村人にかかったので、お坊さんに、「濡れ衣をきせられて困っています。どうか助けてください」とお願

いした。するとお坊さんは「米はあの岩が食べられたのだ。南無妙法蓮華経と彫ってあるだろう。あの米をお供えとして受け取られたのだ」といって、村人を助けた⁵¹⁾。

年貢米四俵が一夜のうちになくなっていて、貧乏な村人は盗まれてしまったと考えた。お坊さんは村人を庇うため、岩石が食べてしまったと言って、南無妙法蓮華経を彫って石を封じた。先に考察した米かみ岩と違い、ここでの米かみ岩は米を食べないが食べたとみなされている。村人にとって、岩石が米を食べるのは不思議であるがこのことに納得し、岩石を封じるため、僧侶を招いた。ほかにも、広島県には米嚙岩があり、一夜で千俵の米がなくなり、この岩が食べてしまったと思って法華宗の僧侶たちが集まり、岩上に南無妙法蓮華経を刻した⁵²⁾。一夜で4俵または千俵という大量の米がなくなるのは大変なことで、泥棒が誰なのかもわからず、巨石にその罪を転嫁し、村人を庇った。

3.4 成長する岩石

血が出たり、話したり、泣いたり、米を食べたりする岩石伝説の他にも、もう一つ、身体的な特徴をあわせもつ岩石の伝説がある。これは成長する岩石である。成長する岩石伝説には大きくなる伝説と小石を生む伝説がある。本節ではこの2種類の成長する岩石伝説を分析する。

3.4.1 大きくなる岩石

広島県芦品郡新市町下山守村には産社があり、産神を祀っていた。この産神のご神体は巖島より参詣した村人の袂の中で持ってきた石である。この石は年々太くなると伝えられている。

産神 広島県芦品郡新市町下山守村
慶長年中とかや、当村の人、某太郎左衛門と云ふ者、毎歳芸州巖島へ参詣せり。年老て或時神前に額きて、今は老衰に及び侍ら

へば拝啓調も是や限りならんもしるべからず。名残おしうこそ侍らへど、涙を流して名残惜しげにあと見かえし見かへし立ち帰る。扱、船中にて思はず袖の中に一つの小石あり。是は同船の若人の戯れなるべしと、海に投げ入れてねたりしに、又袖の中にかの石あり。若や神のなし給へる業ならんもしるべからずと思ひふしたりし夢に、明神うるはしき御姿にて枕にたたせ給ふと見えし。夢さめて天明なりしかば、早速起きて彼石を押戴き、宮島の方を伏しおがみおがみ、戴きて持ち帰り、しかしかと下向（一向か）悦び、つどひし人に語りければ、村中野もの伝へ聞き、議して小祠を建て、枯れ石を納めて神爾とし、巖島大明神と崇め祭り産神とせり。此石、袖に入れてかへりしに。漸々にふとくなり、今は高さ一尺七鉢寸、廻り二尺二三寸になれりと云ふ⁵³⁾。

産神は某太郎左衛門と云いう人が袖の中から持ってきた巖島の石であり、出してもまた袖の中に入った。夢の告げによって巖島大明神または産神として祀られるようになった。さらに石は年々太くなり、大石になった。

上記の伝説のように巖島、伊勢などへ参詣に行き、袂または草鞋、荷物の中に入った石を持って帰って、だんだん大きくなる石は「たもと石」と呼ばれている。たもと石については、柳田国男が『日本の伝説』においてすでに論じているように、柳田は、広島、長野、高知、熊本などの地域における成長する岩石伝説を集め、その特徴を三つ提示した⁵⁴⁾。すなわち、岩石は神の依り代であること、伊勢信仰や熊野信仰などの力で成長すること、人々の想像力によるものであることの三つである。岩石は神の依り代として神聖視されるばかりではなく、岩石はそれ自体も霊体であるので成長することができるという。そして、岩石信仰は他の信仰と習合して様々な伝承を生み出した。産神伝説において産神は

巖島信仰と結びついている。また、伊勢信仰、熊野信仰などと関連する岩石伝説も少なくない。例えば、三瀨郡大石村に鎮座する「大石神社」に伝わるたもと石がある。

霊石 福岡県筑後

社家伝へていふ。往昔大石越前守、今の神体の霊石を懐にして、伊勢国より此地に來り伊勢大神宮と崇め祭れりと、又一説に古昔一老尼ありて、小石を袖にし來りて此地に棄つ。其石漸々肥大し、慶長年間に到り、其径方九尺、別に一箇の石方三尺、厚三尺なるがあり、里民天照大神と崇め、伊勢御前と稱し、小祠を創立すと。何れか正説なるを知らず。年歴も亦詳ならず⁵⁵⁾。

大石越前守が伊勢より持ちかえった霊石を伊勢大神宮として祀った。あるいは、老尼が伊勢より持ちかえった岩石が成長して天照大神と崇め祀られたという。大石越前守か、老尼か、この岩石は伊勢国から持ち帰った岩石であるので、伊勢信仰と結びついているため年々成長している。

上述の2つの伝説では石がだんだん大きくなると記されたが、成長する時間は明確ではない。埼玉県入間郡毛呂山町川角にある石神は春になると成長するという。

石神 埼玉県入間郡毛呂山町川角

南蔵院内の石神は、柔らかい石質なので欠けることがあるが、春になると成長してもとのようになったという⁵⁶⁾。

石神が春になると、欠けた部分が成長し、元のようになった。他の成長する岩石は大きくなるのに対して、石神はただ欠けた部分が成長する。春は万物が成長し、満ちていく季節であるので、石も植物のように春になると成長すると信じられていた。

岩石が成長しているという考え方は古くから

伝わっている。「君が代」の源『古今和歌集』に収められている「我が君は千代にやちよにさざれ石の巖となりて苔のむすまで」⁵⁷⁾という和歌によると、古代から小石は千年や万年が経つと巨石になると信じられていた。小石から巨石になるには、千年や万年かかる。おそらく、人間の周りの植物や動物などそれぞれが各自の時間の中で成長するので、岩石も岩石の時間の中で成長すると考えられていたのだろう。

3.4.2 小石を生む岩石

岩石は成長するだけでなく、小石を生むこともできる。小石を生む岩石伝説は他の岩石伝説と比べて少ないが、岩石の生殖力という特徴を表している。『日本伝説大系』と『日本の伝説』の中でわずか3話が所収されている。その中の1話は石同士で人間のように結婚し、小石を生んだ⁵⁸⁾。他の一話の子宝石は海で釣りあげた霊石で、成長して二個になり三個になった⁵⁹⁾。最後の分身石は、石は五つに割れて、重量も年々増えるという⁶⁰⁾。

テキストには3話しかないが、岡山県の三石神社の由来も小石を生んだことである。

昔、神功皇后が三韓征伐の時、和氣郡三石町の地を通過し、石に腰かけて休まれた。皇后は当時妊娠していたので、それから付近の石はみな子をはらんだように、小さな石を含んだ石となった。この石をはらみ石といい、子がない時、それをもって帰り祀ると、数か月で妊娠することができるという。腰掛石は、神体として三石大明神としてまつた。現在は合祀して三石神社となっている⁶¹⁾。

この伝説からは、妊娠している神功皇后が腰かけてから、岩石は小石をはらむようになったことがわかる。また岡山県御津賀茂川町溝部の山中に子産石といって、持ち帰って庭に置くと、

年々数を増やすという岩石があるという⁶²⁾。

子宝石や三子岩などの伝説から、岩には霊があり、成長でき、小石も産めることが分かる。その成長の霊力のある岩石に祈願すると、子宝を授かると信じられ、小石を生む岩石を神聖視した。また、神功皇后のような歴史上または神話上で有名な人物に結びつけることによって、その岩の神聖性が一層強まり、信仰されるようになったと考えられる。

4. 岩石の身体性と岩石信仰

上記で分析した岩石伝説において、岩石から血が出たり、泣いたり、大きくなったり、話したりするありようは人間の身体的特徴と重なる。岩石は自然物であるが人間の身体的特徴を有するように語られたのは、岩石にも「身体性」と呼べるものを人々が見出そうとしたからだと考える。本章では岩石の「身体性」と岩石信仰を検討する。

テキストにおける身体に関する岩石伝説は110話あり、本稿では28話しか紹介しなかったが、いずれも、岩石の身体性の特徴が窺える伝説であると考えられる。紹介した28話の岩石伝説を図表2にまとめた。

表2から、岩石の身体性と岩石信仰について、以下の4点を指摘することができる。

第1に、岩石伝説における身体性に関する岩石の特徴は、血が出る、声を出す、米を喰らう、成長するである。血の出る岩石は、赤い血が出たのみならず、さらに黒い血と紫の血も出た。前章で分析した坊主岩と生石皇様から黒い血が噴き出したのに対して、久米町の石神からは紫の血が出た。人間の血の色は赤であるが、岩石の血は赤に限らないことを示している。

声の出る岩石は、泣く岩石と話す岩石という二種類に分けられる。その中に、泣く岩石は赤子の泣き声と動物の泣き声のほか、話す岩石は「元の場所に帰りたい」、「呑んでやるぞ」などと話した。岩石は人間に通じる言葉だけではなく、

動物の鳴き声などの音声も発する。さらに岩石は異変の前夜、蛙の鳴き声などの動物の声によって異変を予告する。岩石は言葉で意志を伝えるほかに、予言などの霊験もあることが窺える。

また、柳田国男は「夜啼きの石」において、近世の人々が夜啼を路傍の神に祈るに至った理由は二つあり、一つは子安地藏などに現れた道の神が子児を愛護するという信仰、一つは夜啼き石という名から特に夜泣きに有効のように考えた誤解であると分析した⁶³⁾。子育ては大変だが、赤子の夜泣きも親にとっては心痛の一つであろう。夜泣きに対しては種々の方法がとられ、その中で夜泣き石は子供の夜泣きに効くと考えられてきた。伝説では夜泣きしていた子供を真夜中にこの石まで連れていき、その上に立たせたところ、たちまち泣きやんで、それからこの子は夜泣きをしなくなったという。村の生活において塞の神は村の子供を守り、子供の健康や安全などを祈願する対象であるが、塞の神は石像が多い。多くの夜泣き石伝説では夜泣き石が子供の夜泣きに験があると信じられ、その石を撫でたり、叩いたりし、子供の夜泣きが治るといわれてきた。岡山県津山市新田には夜泣き松とあって、夜泣きを治す松があった⁶⁴⁾。子供の夜泣きを除くため、夜泣き石や夜泣き松への祈願などの種々な工夫が凝らされたことが想像できる。

米を食べる岩石は大量な米を食べたほかに、外見も奇抜である。出口米吉は「我国に於ける石崇拜の痕跡」において、石神としての石の形を、例えば巨大なる石、美しい石、赤い石、紋様ある石、鳥獣の形に似た石等に分類した⁶⁵⁾。大場磐雄も石信仰の要因として特殊な外見も挙げている⁶⁶⁾。岡山県の米かみ岩をはじめ、広島県の米かみ岩などの米を食べる岩石の外見が独特であり、牛の形、あるいは口を開けたような形をしておりかつ、巨石である。この変わった外見で、巨大なる岩石は大量な米を食べると信じられた。さらに、巨石に米を食べられる罪を村人が転嫁

表2 本稿で紹介した身体に関する岩石伝説

本稿で紹介した身体性に関する伝承の一部											
番号	タイトル	伝承地	現在地	身体性	身体性の特徴	身体性を表す時間	場所の特徴	結果	伝説の特徴	出典	
1	陀蹉石	岡山県津山市久米郡倭村大字油木北	現存せず	血の出る岩石	紫の血	割った時	路傍	祠を建てて神として祀った	地名伝説	『久米郡誌』	
2	岩神	群馬県前橋市岩神町	群馬県前橋市岩神町	血の出る岩石・声の出る	濃血、人の叫ぶがごとの声	割ろうとした時	水傍	石工四肢麻痺し、両眼暗して倒れて死んだ	地名伝説	『日本伝説大系』4	
3	坊主岩	岡山県浅口郡金光町占見	岡山県浅口郡金光町占見	血の出る岩石	黒い血	割った時	池傍	凶事は起こらなかつた	自然説明伝説	『岡山の伝説の伝説29』	
4	夜泣き石	長野県更級郡	長野県更級郡	血の出る岩石・泣く岩石	夜泣き、血を吹く	悟った時、夜	境	夜泣きをやめた	自然説明伝説	『日本伝説大系』7	
5	生石皇様	岡山県浅口郡鴨方町六条院中生石	岡山県浅口郡鴨方町六条院中生石	話す岩石・血の出る岩石	生石へ帰りたいたいと泣いて、真っ赤な血汐が噴き出した	夜	畑の道	生石へ戻させ、話をやめた	自然説明伝説	『日本伝説大系』10	
6	石神	岡山県久米郡久米町油木上	岡山県久米郡久米町油木上	血の出る岩石・米を食べる岩	紫いろの血が湧き出した	たたく時	山(七森神社)	石を叩く村人が倒れて死んだ	自然説明伝説	『日本伝説大系』10	
7	血の出る礎石	奈良市大安寺	奈良市大安寺	血の出る岩石	真っ赤な血がふきだした	割りかけた時	大安寺の西塔の心礎	石工が病みついて死んだ	文化叙事伝説	『奈良の伝説の伝説13』	
8	夜泣き石	静岡県掛川市日坂村小夜の中山	静岡県掛川市日坂村小夜の中山	泣く岩石	赤坊の泣き声	夜	峠	供養され、夜泣きをやめた	自然説明伝説	『日本伝説大系』7	
9	泣き石	静岡県掛川市日坂	静岡県掛川市日坂	泣く岩石	赤子の泣き声	昼夜	滝	字を彫られた	自然説明伝説	『日本伝説大系』7	
10	夜泣き石	長野県下伊那郡上郷村字別府の金沢橋の袂の田の中	長野県飯田市上郷別府	泣く岩石	小児の泣き声	夜	畑の中	供養観音を建立し、夜泣きをやめた	自然説明伝説	『日本伝説大系』7	
11	産石	上州国吾妻郡中之条町大字五反田	群馬県吾妻郡中之条町大字五反田	泣く岩石	赤子の泣き声	不明	道端	冥福を祈ると泣かなくなつた	自然説明伝説	『上州の伝説の伝説27』	
12	石碑	岡山県苫田郡加茂町山下	岡山県津山市加茂町山下	泣く岩石	白狼の泣き声	夜	墓	もとの場所に戻し、夜泣きをやめた	自然説明伝説	『日本伝説大系』10	
13	夜泣き石	静岡県田方郡中伊豆町菅引	静岡県伊豆市菅引	声の出る岩石	奇妙な音	夜	沢	昔丑満刺ともなれば奇妙な音を發した	自然説明伝説	『日本伝説大系』7	
14	コンソコイハ	岡山県御津郡円城村字細田	岡山県加賀郡吉備中央町	話す岩石	コンソコ話す	夜	不明	夜にそばを通ると、話す音がする	自然説明伝説	『岡山文化資料3』	

15	米かみ岩	岡山県真庭群落合町河内	岡山県真庭群落合町河内	米を食べる岩石	稲を食い荒した	夜	不明	稲を食べられた村は疲弊した	自然説明伝説	『日本伝説大系』10
16	米かみ岩	広島県三次市重宗山	広島県三次市重宗山	米を食べる岩石	一夜で米四俵を食べた	夜	山	岩を封じられた	自然説明伝説	『日本伝説大系』10
17	米囃岩	広島県三次市三若町三若村	広島県三次市三若町	米を食べる岩石	一夜で米千俵を食べた	夜	山林の中	岩石を封じた	自然説明伝説	『日本伝説大系』10
18	産神	広島県芦品郡新市町下山守村	広島県福山市馱家町下山守	大きくなる岩石	だんだん大きくなる	不明	祠	巖島大明神として祀られた	縁起伝説	『日本伝説大系』10
19	霊石	福岡県筑後	福岡県三潁郡大石村	大きくなる石	だんだん肥大した	不明	祠	天照大神と崇められた	地名伝説・縁起伝説	『筑後志・校訂』
20	石神	埼玉県入間郡毛呂山川角	埼玉県入間郡毛呂山川角	大きくなる岩石	かける部分を成長する	春	南蔵院内	神として祀られた	自然説明伝説	『日本伝説大系』5
21	七不思議の石	秋田県北秋田市阿仁萱草字水上口萱草駅に近くの谷	秋田県北秋田市阿仁萱草字水上口萱草駅に近くの谷	小石を生む岩石	石同士で結婚し、小石を生んだ	不明	谷	石を結婚させた	自然説明伝説	『秋田の伝説 日本伝説大系』4
22	霊石	愛媛県南宇和郡城辺町菊川	愛媛県南宇和郡愛南町菊川	小石を生む岩石	成長し、二個になり三個になった	不明	巖島神社	祀られた	自然説明伝説	『日本伝説大系』12
23	分身石	伊予国御荘町菊川内海村	愛媛県南宇和郡愛南町御荘菊川	小石を生む岩石	石は五つに割れて、重量も年々増える	年々	巖島神社	祀られた	自然説明伝説	『伊予の伝説 日本伝説大系』36
24	三石神社	岡山県備前市三石	岡山県備前市三石	小石を生む岩石	小石を孕む	神功皇后は腰かけで	三石神社	三石神社として祀られた	縁起伝説	『岡山文庫23 岡山伝説』
25	子産石	岡山県御津賀茂川町溝部の山中	岡山県加賀郡吉備中央町溝部の山中	小石を生む岩石	数を増やす	年々	山中	庭石や床石にしてあった	自然説明伝説	『岡山文庫23 岡山伝説』
26	クモ石	埼玉県秩父郡長瀬町大字長瀬	埼玉県秩父郡長瀬町大字長瀬	大きくなる岩石	小石から1メートルに成長した	不明	熊野神社	祀られている	自然説明伝説	『埼玉の伝説 日本伝説大系』18
27	しゃべり石	群馬県吾妻郡中之条町大道	群馬県吾妻郡中之条町大道	話す岩石	敵の居場所を教えたり、たびたび語った	夜	路傍	割られた	自然説明伝説	『日本伝説大系』4
28	夜泣き石	沖縄県具志川市上平良川	沖縄県うるま市平良川	泣く岩石	牛の泣くように鳴いた	夜	井戸の傍	急所を切られた	自然説明伝説	『日本伝説大系』10

し、村人を庇う場合もある。

成長する岩石は大きくなる岩石と小石を生む岩石という二種類がある。大きくなる岩石は、熊野神社、伊勢神宮、巖島神社などに参詣した時、袂をはじめ、荷物の中に隠して持ち帰ったたと石と、海、川などの水辺で釣った小石または畑に落ちた小石という二種類の岩石である。また、小石を生む岩石は数少ないが、全て子授けの神として祀られていた。折口信夫の「石に入るもの」⁶⁷⁾、石上堅の『新・石の伝説』⁶⁸⁾などの研究によると、岩石が大きくなったり、子石を生んだりするのは岩石が神の依り代であること、または岩石にタマが入っていることに由来するという。つまり、岩石が大きくなったり、小石を生んだりするのはタマが入っているからである。

岩石は成長するが、岩石の成長時間は百年、千年かかる。『埼玉の伝説』にある、くも石は小石から1メートルにまで成長した。この石はある人が紀州の熊野に詣でに行ったとき、わらじの中に小石が入り、出しても出しても入ってくるので持ち帰り、お祀りをしたところ今では1メートルになったという。現在は熊野神社で祀られているという⁶⁹⁾。この岩石は熊野神社へ参拝に行ったとき持ち帰った小石であり、奉祀によって小石から1メートルに成長した。巨石に成長するまでどのぐらい時間がかかるのかは分からないが、人の一生の時間では測れない。「君が代」に岩石の恒久性を借りて皇権の永久性を比喻していることが想起される。

第2に、夜という時間になると、米を食べたり、泣いたり身体性を表す岩石伝説が多くある。人間にとって、夜は鬼、妖怪などの霊の活動時間である。たとえば『美濃・飛騨の伝説』には盤の石という石がある。この石は鬼たちが遊んだ双六の盤であるが、夜が明けた時に慌てて暗い穴へ逃げ込んだ鬼が投げだした双六の盤が、石になってしまったと言われている⁷⁰⁾。鬼にとって、夜は活動時間であるが、昼はそうではない

ため、夜明けになったら逃げねばならない。神または霊としての岩石は夜になって身体的特徴を表したと考えられる。

第3に身体性を表す岩石の場所は、神社のほか、水傍、池傍と滝などの水辺、峠、山中など境に属する場所にあることが明らかとなった。柳田国男は『石神問答』において、岩石信仰に境界神的な役割があると示した⁷¹⁾。また、日本で最も古く岩石信仰の事実を明記したのは、『日本書紀』神代卷上における伊邪那岐は黄泉から追いかける伊邪那美を阻止するため、泉津平坂において千人所引磐石を以て坂道を塞いだという部分である。図表2で挙げた身体性を持つ岩石は境に位置するケースが多くあり、特に多いのは声の出る岩石の場合である。特に、声の出る岩石のうち、泣く岩石と話す岩石は元の場所に帰りたいことを示す時に身体性を表す。そして、元の場所に戻したり、割ることをやめたりすると岩石は話さなくなった。この点について、石上堅は夜泣き石について「最も多いのは元の場所へ運び移したら、泣かなくなったと伝えるもので、明らかにそのありどころを勝手に変えられては、境の神の資格・職能を失うことになる」と論じている⁷²⁾。つまり、岩石を元の場所から運び移すと、境の神の資格・職能を失うため、元の場所に帰ることを欲するのだというわけである。第3章で分析した生石皇様は道辺にあるので境の神と断定はできないが、後樂園から急いでもとの場所に戻すと、泣くことをやめ、その後村人に神として祀られるようになったのである。

第4は、身体性を表す岩石を神として祀った場合があるが、そのほか霊として封じ、割った場合もある、という点である。岩石は神の依り代、またはタマが入っているとみなされたため、たとえば群馬県の岩神、岡山県の石神などの岩石を割った石工は死んでしまい、岩石が神として祀られることになる。野本寛一が『石と日本人』において石と日本人との精神的なかわりの発端は、「磐座」だったのでであると主張したことが

想起される⁷³⁾。

石神のように祀られることに対し、米を食べる岩石を止めるために、僧侶を招いて岩石の霊を封じたこともある。第3章で考察した米噛岩は一夜で千俵の米を食べたため、法華宗の僧侶たちが集まり、岩上に南無妙法蓮華経を刻んだという話がある。

さらに、身体性を持つ岩石は不気味なものとして割られたこともある。例えば、『日本伝説大系』第4巻にはしゃべり石がある。この石は割られてしまったことが原因で死んだ。

大道石の道路に面して一段高いところに三角形に突き出した巨石をしゃべり石という。むかし、ある時、この石がしゃべったというところから、この地域をしゃべり石というようになったという。時代は分からない昔のこと、中国地方当たりの人だというのが、親族の仇を訪ねて全国を歩いていた人がこの地に来たとき、日が暮れてしまったために、この石の根方に仮の寝を結んだところ、夜中に、この石から声が出て、敵のいる場所を教えてくれた。その後もたびたび石が語ることが続いたが、ある時、この話を伝え聞いた北越の人が、太刀を振って石を断わったところ、その後は語る事がなくなった。このとき切り取ったところが石の東端で、切られた石は空を飛んで、はるかに離れた蟻河の割石まで飛んで、現在に残るワリイシになったのだという⁷⁴⁾。

この記述からわかるようにしゃべり石は割られた途端に、語らなくなった。同じように、沖縄県志川市上平良川には夜泣き石があり、急所を切ると泣かなくなった⁷⁵⁾。要するに、岩石は話せても、泣いても、急所を切られると話すと泣くという行為を止めた。身体性を持つ岩石は怪異であるとみなされ、切られることを通してしゃべる、泣くという行為をやめることが窺える。

5. 結論

本稿で明らかにしたように、小石を生む岩石があり、成長する岩石があり、さらに死ぬ岩石があり、人間の誕生から死までの身体的な特徴を備えている各種類の岩石伝説が数多くある。アニミズムの考え方によって、石、樹木、水などのあらゆる自然物は人間と同じく、霊魂が入っていると考えられてきた。また、岩石は人間にとって最も縁深い自然物の一つであり、生活用品、武器、副葬品などとして広く使われてきた。人間の日常生活に大きな役割を果たしている岩石に対して、人間は特別な感情を注ぎ、岩石を特別視し、信仰の対象にしてきた。身体性を持つ岩石の発想も同じであると考えられる。

岩石は人間の一生とも緊密に関わり、通過儀礼にも大きな役割を果たしてきた。岩石は子授けから病氣平癒、鎮魂までを願う対象または守り神として扱われてきた。例えば、3章で考察した子授け祈願の愛媛県の分身石、安産祈願の岡山県の三石神社、また、子供の夜泣きを治す長野県の夜泣き石などである。また本稿では触れなかったが、百日の食いぞめ、成年儀礼の力石、墓地の埋葬時点におかれる枕石など様々な人生儀礼に用いられてきた。このように岩石は、人間の一生の重要な節目に大きな役割を果たしてきた。また、話す岩石の伝説には異変の前夜に声を出した蛙石、元の場所から離れてはいけない、村を守る境神の資格としての夜泣き石などの岩石は、日常生活に加護や安産などをもたらす役割を果たしていた。

岩石は、人間が自然をコントロールし切れず、不安定な生活を送る中で、安定した力を与えるのみなし得る存在だったのではないだろうか。このような岩石の特徴が、身体性を持った数多くの多様な伝説を生み出してきた要因の一つだったと考えられる。

注

1) 清水金十郎『久米郡誌』久米郡教育会、1923。

- 2) 荒木博之他『日本伝説大系』1-15 みずうみ書房、1982-1990。
- 3) 池田弥三郎他『日本の伝説』1-50 角川書店、1976-1980。
- 4) 出口米吉「我国に於ける石崇拜の痕跡」『東京人類学会雑誌』24 (271)、1908、10-22頁。
- 5) 柳田国男「石神問答」『定本柳田国男全集』12 筑摩書房、1910、1-161頁。
- 6) 柳田国男「生石伝説」『定本柳田国男全集』5 筑摩書房、1911、493-498頁。
- 7) 柳田国男「夜啼石伝説」『定本柳田国男全集』5 筑摩書房、1914、499-503頁。
- 8) 柳田国男「老女化石譚」『定本柳田国男全集』9 筑摩書房、1916、132-146頁。
- 9) 柳田国男「日本の伝説」『定本柳田国男全集』26 筑摩書房、1940、131-261頁。
- 10) 池上隆祐編「石」『郷土』郷土発行所、1932。
- 11) 折口信夫「石に出で入るもの」『石』郷土発行所、1932、7-50頁。
- 12) 伊波普猷「成長する石」『石』郷土発行所、1932、105-119頁。
- 13) 大場磐雄「日本に於ける石信仰の考古学的考察」『国学院大學日本文化研究所紀要』8、1961、1-26頁。
- 14) 野本寛一『日本の民俗学シリーズ1石の民俗』雄山閣出版、1975。
- 15) 野本寛一『石と日本人—民俗探訪』樹人社、1982。
- 16) 大護八郎『石神信仰』木耳社、1977。
- 17) 五来重『石の宗教』講談社学術文庫、2007。
- 18) 五来重、注17に同じ、9頁。
- 19) 中沢厚『石にやどるもの—甲斐の石神と石仏』平凡社、1988。
- 20) 石上堅『新・石の伝説』集英社、1989。
- 21) 長山幹丸『石—伝説と信仰 民俗選書4』秋田文化出版、1994。
- 22) 吉川宗明『岩石を信仰していた日本人—石神・磐座・磐境・奇岩・巨石と呼ばれるものの研究』遊タイム出版、2011。
- 23) 柳田国男監修・日本放送協会編『日本伝説名彙』日本放送出版協会、1950、105-219頁。
- 24) 柳田国男「袂石」『定本柳田国男全集』26 筑摩書房、1940、209-218頁。
- 25) 折口信夫、注11に同じ。
- 26) 折口信夫「霊魂の話」『折口信夫全集』3 中央公論社、1929。
- 27) 折口信夫「石の信仰とさえの神と」『折口信夫全集 ノート編』7 中央公論社、1939、107-117頁。
- 28) 石上堅、注20に同じ。
- 29) 井田安雄「しゃべり石」『日本伝説大系』4 みずうみ書房、1986、348頁。
- 30) 太田忠久「坊主岩」『岡山の伝説 日本の伝説29』角川書店、1978、48頁。
- 31) 加茂徳明「夜泣き石」『日本伝説大系』7 みずうみ書房、1982、257頁。
- 32) 立石憲利「夜泣き石」『日本伝説大系』10 みずうみ書房、1987、223頁。
- 33) 立石憲利「米かみ岩」『日本伝説大系』10 みずうみ書房、1987、235頁。
- 34) 石工が大安寺の西塔の心礎を割りかけたが、石の中から真っ赤な血が噴き出した。石工が逃げ帰り、病みついて死んだ。(岩井宏美『奈良の伝説 日本の伝説13』角川書店、1976、25頁)。
- 35) 立石憲利、注32に同じ。
- 36) 小松和彦『異界と日本人—絵物語の想像力 角川選書356』角川書店、2003、14-15頁。
- 37) 田中久夫「老ケ石」『日本伝説大系』8 みずうみ書房、1988、294-295頁。
- 38) 岩井宏美、注34に同じ。
- 39) 加茂徳明、注31に同じ、254頁。
- 40) 加茂徳明、注39に同じ、255頁。
- 41) 谷川健一『日本民俗文化大系2 太陽と月—古代人の宇宙観と死生観』小学館、1979、328頁。
- 42) 加茂徳明、注31に同じ、256頁。
- 43) 都丸九十九・池田秀夫「産石」『上州の伝説 日本の伝説27』角川書店、1978、78頁。
- 44) 加茂徳明、注31に同じ、257頁。
- 45) 立石憲利、注32に同じ、224頁。
- 46) 立石憲利、注45に同じ、223頁。
- 47) 加茂徳明、注31に同じ、255頁。
- 48) 立石憲利、注32に同じ。
- 49) 文献研究会「コンコンイワ」『岡山文化資料3』奥山書店1931、201頁。
- 50) 立石憲利、注33に同じ、235頁。
- 51) 立石憲利、注50に同じ、234頁。
- 52) 立石憲利、注51に同じ、235頁。
- 53) 村岡克彦「中野の出雲石」『日本伝説大系』10 みずうみ書房、1987、222頁。
- 54) 柳田国男、注9に同じ。
- 55) 杉山正伸他 編『筑後志・校訂』本荘知新堂、1907、151-152頁。
- 56) 常光徹「成長する石」『日本伝説大系』5 みずうみ書房、1986、368頁。
- 57) 松田成穂「古今和歌集 巻第七」『古今和歌集完訳日本の古典9』、1983、199頁。

- 58) 野添憲治「七不思議石」『秋田の伝説 日本の伝説14』角川書店、1977、111頁。
- 59) 松本孝三『日本伝説大系』12 みずうみ書房、1982、279頁。
- 60) 和田良誉「分身石」『伊予の伝説 日本の伝説36』角川書店、1979、51頁。
- 61) 立石憲利「子持ち石・すり石」『岡山文庫23 岡山の伝説』日本文教出版、1969、122頁。
- 62) 立石憲利、注61に同じ。
- 63) 柳田国男、注7に同じ、501頁。
- 64) 立石憲利、注62に同じ、116頁。
- 65) 出口米吉、注4に同じ。
- 66) 大場磐雄、注13に同じ。
- 67) 折口信夫、注11に同じ。
- 68) 石上堅、注20に同じ。
- 69) 諸田森二「クモ石」『埼玉の伝説 日本の伝説18』角川書店、1977、134頁。
- 70) 長倉三朗他「磐の石」『美濃・飛弾の伝説 日本の伝説34』角川書店、1979、114頁。
- 71) 柳田国男、注4に同じ。
- 72) 石上堅、注20に同じ。
- 73) 野本寛一、注15に同じ、14頁。
- 74) 井田安雄、注29に同じ、346頁。
- 75) 遠藤庄治『日本伝説大系』15 みずうみ書房、1989、429頁。

2020年9月29日 受付

2020年12月7日 採択決定

A study of Bodylore in Legends Concerning Rocks with a Focus on the *Nihon Densetsu Taikei* and *Nihon-no-Densetsu*

SONG Dandan

Department of Japanese Studies,
School of Cultural and Social Studies,
The Graduate University for Advanced Studies, SOKENDAI

Summary

This paper discusses Japanese legends concerning rocks that involve the human body with reference to the *Nihon Densetsu Taikei* published by Mizuumi Shobo and *Nihon-no-Densetsu* published by Kadokawa Shoten. The author explores the characteristics of rock legends that involve the human body, as well as the human beliefs behind them.

According to the previous research, there are a number of rock legends featuring the human body, and the author categorized them into four types by the characteristics of rocks: bleeding rocks, vocalizing rocks, rice-eating rocks, and growing rocks. In the first type, rocks are observed in a deserted place, and the rocks bleed when they are smashed or men achieve enlightenment. In addition, the legends state that the blood color of the rocks were varied and not only to red, but sometimes also included purple or black. The bleeding rock legend indicates that the rock is not just an epitome of a godly religion, but an animate being. With regard to the second type, the rocks can be further subcategorized into talking rock legends and weeping rocks. The former can express their feelings, such as wanting to return to where they used to be, or predict disaster through human language, animal voices, or the crying sound of ogres. Third are the rice-eating rock legends. These rocks may be interpreted as being alive and eating like creatures. Last, growing rocks can be divided into rocks that increase in size and child-bearing rocks. Some grow and give birth to pebbles.

Bleeding, vocalizing, rice-eating and growing are different attributes of human bodylore, but they all share something in common. First, rocks that bleed, talk or eat rice are active at night. The language of rocks that can vocalize is not only human language but also rock-specific languages that are similar to animal voices. In addition, in some legends rocks grow, but at a speed much slower than that of humans, taking 100 or 1,000 years. Nonetheless, it seems that they are born, grow and die like human beings.

The author regards that there are three reasons for the physicality of rocks. First, a rock is not just an epitome of a godly religion, but an animate being. Next, in the animistic world, people believed that like rocks, plants and all elements of nature have souls. Last, rocks were believed to be closely related to the process of life. Such rock characteristics may have been one of the factors that produced many diverse legends involving the body, even though they are inorganic.

Key words: Rock legends, beliefs of rocks, Bodylore, Animism, The rites of passage